

## フィリピの看守の回心

フィリピにおいて、使徒パウロにより古い女が悪霊の呪縛から解放される出来事は、一大騒動を引き起こした。生活の手段を奪われた奴隷女の主人たちは怒りに燃えてパウロとシラスを捕らえて、市の役人たちに彼らを突き出した。パウロとシラスは正当な裁判なしに、公衆の前で激しく鞭打たれ投獄された。しかし、ルカはこう記している。「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っているとき、他の囚人たちはこれに聞き入っていた」（16:25）。投獄という苦難すらも、泰然自若として受け止めるその姿に圧倒される。

二人の祈りと賛美に応えるかのように、突然の大地震が起った。たちまち獄の戸が開き、鎖も解けてしまった。それを見て、囚人らがみな逃亡したと思った看守は、つるぎを抜いて自殺しようとした。パウロは大声で叫んだ、「自害してはいけない。私たちは皆ここにいる」。囚人が逃げないで皆どまっている！これは看守にとって驚きであったであろう。看守は、明りを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏した、そして二人を外に連れ出して、彼は叫ぶ、「先生方、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」。

なぜ震えながらひれ伏したのであろうか。なぜ「先生方、私は救われるために、何をすべきでしょうか」と叫んだのであろうか。ルカは詳しくは書いていないが、それが彼の魂の叫びであることは明らかである。25節が告げるように、薄暗い獄屋でのひたすら神への祈りと賛美を続けていたとき、他の囚人たちはじっとそれに聞き入っていた。パウロとシラスは、暗闇の中で、囚人たちにイエス・キリストの福音を伝えたであろう。その話し声は、当然のように監視していた看守にも聞こえたであろう。そして私は確信するが、地震が起こった時、その看守は居眠りしていたとあるが、しかしその前に明らかに他の囚人たちへのパウロとシラスの話しを聴いている。地震後、ただちに「先生方、救われるために、わたしは何をなすべきか」と叫ぶ、その叫びにそのことがよく表れている。それは「求道の叫び」である。換言すれば「このような者でも救われますか？」という問いなのである。

「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われる」。ここにこのストーリーのメッセージがある。すばらしい福音の勧めである。人は皆、救いを必要としている。救われるために何をなすべきか？それはすべての人の魂の叫びである。それに対して、イエスを信じる信仰こそ、救われる道である——これが福音のメッセージの中心である。

キリスト教信仰とはイエスを救い主と信じる信仰である。「イエスを信じる」とはただ単に「イエスの教え」を学ぶということではない。またその倫理的教養に感心するというのではなく、イエスに「信頼して生きる」ことを意味する。主イエスがこの私のために十字架に死んで下さった、この私の罪を贖って下さった、救いの道を開いて下さった、この私もまたこの贖いの恵みに招かれている！—そのことが分かった時、主イエスを信じ、主イエスにゆだねて行く！これが信仰である。そして、信じゆだねて行くとき、私たちは主イエスとその恵みをますます深く理解するようになる。信仰とは、身をゆだねて初めて分かる恵みの世界である。思い切りが大切。飛び込んでいくのである。飛び込んで行く時、恵みの世界が開かれて行くのである。